

## 「ルネ・シャルと レジスタンス」

西永良成

総合文化研究所・日仏会館共催シンポジウム

詩人ルネ・シャルの生涯と作品に関して、とりわけ注目  
値する重要な研究テーマ・領域として、1…(ペトラルカ、サ  
ドの文学的レミニッサンスをふくむ) 特権的な場所としての生地  
リル＝シュル＝ソルグおよびプロヴァンス地方のこと、2…両  
大戦間最大の文学・芸術運動であるシュルレアリスムへの参加  
と離脱のこと、3…フランス現代史の画期的な出来事である  
レジスタンス体験のこと、4…(ポール・ヴェーヌが初めて指摘  
した) 神秘経験「夜と忘我」のこと、そして5…ヘラクレイト  
スやジョルジュ・ド・ラ・トゥール、ランボーらの先人、また  
ブランショ、カミュ、ハイデガー、ブラック、ブーレーズらの  
同時代人との対話・交流・協力、いわゆるシャルの「至高の  
対話 conversation souveraine」のことなどがすぐに思い浮かぶが、

ここでは3のレジスタンス体験のみをとりあげる。その理由は  
この記念行事の第一部のフィルム上映と第二部のこのシンポ  
ジウムをつなぐため、そしてなによりもカミュを通してシャ  
ールの作品を知った私個人としては、レジスタンス文学の傑作で  
ある『イプノスの手帖 *Feuillets d'Hypnos*』および、これを収め  
る総合詩集『激情と神秘 *Fureur et mystère*』(一九三八―四七年執筆)  
にいまなおもつとも惹かれるからである。

シャルのレジスタンス体験をうかがうのにもつとも重要  
なテキストは、映画『戦争名アレクサンドル』でも多く引用さ  
れていた『イプノスの手帖』だが、シャルがどのようにレジ  
スタンスにかかわり、最終的にどのような歴史的出来事

◆昨年 2007 年はフランスの詩人ルネ・シャルの生誕百年の年だった。そこで日本でもこの記念年に関わる行事を開催することになり、フランス大使館の協力も得て、6月21日東京外国語大学、22日東京日仏学院、23日日仏会館でそれぞれ「シャルと画家たち」、「シャルのタブ」、「ルネ・シャル生誕 100 年記念特別シンポジウム」(第一部：シャルとレジスタンス、第二部：日本におけるシャル受容：現状と展望)と題し、いずれも東京外国語大学総合文化研究所主催または共催のかたちでおこなった。このテキストは 23 日のシンポジウムで私がおこなった報告である。

を認識したかを知るには、唯一の散文集『基底と頂上の探求 Recherche de la base et du sommet』におさめられた「フランシス・キュレルへの手紙 Billets à Francis Currel」その他があり、これも映画では何カ所か引用されていた。さらに、シャルルにはいわゆるレジスタンス詩と呼ばれるものかなりあり、これは『激情と神秘』に分散する形で残されている。そのひとつが映画の最後のほうで朗読された「歴史家の陋屋 Le bouge de l'histoire」で、ここで「歴史家」とは政治行動を回避せず、歴史に参加する人間のことであり、シャルルは三〇年代にヒトラー、フランコ、フランス右翼などのファシズムと正面から真剣に闘ってこなかった詩人としての自分を激しく責めている。

また、「褶曲 Plissement」と題される別のレジスタンス詩では、「私たちは野蛮な忍耐に茫然とした。私たちに未知の、私たちに近づけないランプが、世界の果てで、勇気と沈黙を目覚めたままにしていた。／おお、辱められた生よ、いま私は確信の足取りでおまえの境界へと進む、真実がかならずしも行動に先立つとはかぎらないと知りながら。私の言葉の狂った妹、密閉された私の恋人よ、私は廃墟の館からおまえを救い出そう」と述べ、さらに「拒否の歌——パルチザンのはじまり Chant du refus — Début du partisan」という詩では、「詩人は今後の長い年月父親の虚無にもどつてしまった。彼を愛するきみたちはみんな、もう彼のことを呼ぶな。燕の翼が地上に鏡をもたなくなつたと思えても、そんな幸福のことは忘れるのだ。苦しみをパンにしていた者は、彼の赤々と燃える仮死状態のなかでは眼に見えない。／ああ、美と真実が、解放の祝砲のとき、きみたちを数多く現前させてくれるように！」と述べている。要する

にシャルルは〈美〉と〈真実＝ポエジー〉のために、一九四〇年の屈辱的なフランス敗戦後のいまこそ、武器をとり生命を賭して闘わねばならない、たとえそのためには詩を書くこと、発表することを断念しなくてはならないとしても、と決意する。一九三八―四〇年の時期のシャルルがすでにシュルレアリスムの影響を脱し、彼独自の詩法を確立していたと思えるだけに、この自己犠牲はきわめて悲痛かつ気高いものと言わねばならない。実際、シャルルはこの占領時代に一切作品を発表していない。

ただ、この闘いは「真実がかならずしも行動に先立つとはかぎらないと知りながら」と言われていたように、まったく先の見通しの立たない過酷なもので、同志を見殺しにした、敵を殺害したりするといったことが避けられないもの、ときにほとんど絶望的に孤立したものでさえあった。そこでシャルルは「レジスタンスは期待にすぎない (Résistance n'est qu'espérance)」と書くことになった。ところで、この「期待 espérance」という言葉はシャルルの作品で28回つかわれているが、そのうちの26回はレジスタンス体験以後のものである。彼はこの時期の別の詩でも「私たちを運んでいたあの煙は、狼狽と期待 désarroi et d'espérance に養われたものだった」と言い、「イプノスの手帖』を結ぶ「櫛の薔薇 La rose de chêne」と題する詩でも、「拷問の優等者名簿のうえでは、おお、〈美〉よ、おまえの名前を構成する文字の一つひとつが、太陽の平らな単純さに結ばれ、空を横切る巨大な文に刻まれて、みずからの運命を御しがたいその反意語、〈期待〉によって必死に欺こうと

する人間と結びつく」と書いている。人間の運命、宿命、あるいは条件と呼ばれているものにあえて反対する「期待」、これがシャルルのレジスタンス体験と密接にかかわるキーワードだったと言える。

しかし「期待」といつても、いつたいなんの「期待」なのか。もちろん当座はナチス＝ヴィシー政府の圧政からの「解放」と「自由」への期待にはほかならない。しかしまたより根本的には、ときに「望外のもの l'inspéte」に達することがある人間の未決定性と可塑性にたいする「期待」のこともである。レジスタンスに参加した彼は、この運動のなかで初めて愛や正義に目覚める何人もの人たちに出会い、一緒に闘った幸運を述べ、そのようなひとたちの心の「錬金術」あるいは「褶曲」に感嘆している。また彼自身も心ならずも詩人から闘士にみずから変身することができたし、その結果彼なりに「解放」と「自由」を手につかむこともできた。そこで彼は『イブノスの手帖』の一節でこう言うのである。「人間はけつして最終的には形づくられていないので、みずからの反対物を隠しもっている。人間の循環はなにかしらの要請に晒されているかいないかによって異なった軌跡を描く」。したがって人間とその運命、宿命のあいだには「予期せぬものと変身の飛び地があるのであり、その接近を擁護しその維持を保証すべきである」と。また、「人間には想像できないことを成しとげる能力がある」「私たちの遺産はどんな遺言にも先立たれていない」という、いたって逆説的なアフォリズムもある。そしてこのような人間の未決定性と可塑性の発見が、シャルルにおける「期待の原則」と呼ぶべきものの根拠になったと考えられる。のちに彼が「現実はときに期

待を癒す。あらゆる予期に反して、期待が生き延びる」と書くことになるが、この「現実」がすなわちレジスタンス体験であったと考えると間違いはないだろう。

フランスのレジスタンスはその後国内外の冷酷な権力闘争に明け暮れるようになり、シャルルが幻滅して言うには「(レジスタンスによって)フランスがその存在とその地でただ四、五回しか経験しなかつたような、並はずれた果樹園になるところだった。しかしそのとき、そんな期待に敵対するか、あるいはたんに無縁だったなものかが出現し、その期待を虚無のなかに打ち捨てることになった」。そう確認した結果、彼は間もなく「収穫への執念と〈歴史〉への無関心が私の弓の両極だ。もつとも陰險な敵とは時事的な事柄である」と述べ、「歴史家」からふたたび詩人にもどり、その後半生を反時代的な詩人、ソルグ河畔の孤高の瞑想詩人として過ごすことになる。

シャルルはもともと、「肝心なものはず無意味なものに脅かされている。低劣な循環」だとか、「大部分の人間たちは服従の活気に運命づけられている。彼らが描き直された隷従を遠くに見つけるか、考えるかするや、几帳面な解体仕事をみずからの手に集中する者が彼らの主人となるだろう」などといったアフォリズムに見られるように、かなり悲観的な人間観の持ち主だった。だがそれにもかかわらず、というか、むしろそれゆえにこそかえって——「悲観主義の超原動力 le sur-ressort du pessimisme」によって——、彼は「証拠の崩壊のたびに、詩人は未来の祝砲で応える」という信念をけつして失わず、「期待の原則」、彼の言葉ではレジスタンスの「財宝 trésor」を手

放すことがなかったように思われる。そこで、この人間の「財宝」を讃える詩として、さきの映画でも朗読された「ふたたび彼らにあたえよ Redonnez-leur...」という詩を、最後にもう一度思い出ししておきたい。時代の未曾有の変化とともに「隷従」が全面的になり、「几帳面な解体仕事」が世界化して、ますます「肝心なものはたえず無意味なものに脅かされている。低劣な循環」としか見えない昨今、きわめて含蓄と示唆に富み、私たちを勇気づけてくれる詩だと思われるからである。

ふたたび彼らにあたえよ、彼らのなかにもう現前していないものを、

ふたたび彼らは、収穫の種が穂に閉じこもり、草のうえで動いているのを見ることだろう。

彼らに教えよ、転落から飛躍までの、彼らの顔の十二か月を、彼らはつぎの欲望まで、心の空白をいとおしむだろう。

なぜなら、なにもものも難破しないのだし、遺灰を好みもしないのだから。

そして、土地が果実に到達するのを見ることができぬ者、その者を失敗はいささかも動揺させない、たとえ彼がすべてを失ったとしても。